# マンツーマンで感じる生徒の成長が喜びとやりがい

## 英会話を通して一人一人と向き合う日本が大好きなALT

Sammuel（サミュエル） McDowall（マクダウェル）さん（豊科）

豊科南中学校で英会話を通して生徒一人一人と向き合うサミュエル・マクダウェルさんに話を聞きました。

### あこがれの日本でALTに

日本に行きたいと思い始めたのは10歳くらいの時からです。東京から女子高校生が1年ほどわが家でホームステイをしていました。彼女と暮らす中で受けた影響が強く、それからずっと日本に行きたいと思っていました。その思いを持ちながら地元のモンタナ州立大学に進学し、考古学を学んでいました。在学中に、モンタナ州と熊本県が結んでいる姉妹都市の交換留学で熊本県へ留学する予定でした。しかし、東日本大震災の影響等で断念。長年の夢がかない2013年8月、JETプログラムを使って日本に来ました。

日本での最初の勤務地は熊本県天草市。天草市内の小中学校でALTとして働く一方、天草市内の恐竜博物館でモンタナ州立大学から研究等で訪れる教授たちの通訳をしていました。天草市は当時外国人が少なく、また、内陸のモンタナと違い海に面した町。風土も文化も異なり、家族や友人もいなくて寂しい思いをしたことが何度もありました。

JETプログラムの任期が終わる頃、モンタナに帰るか日本に残るか、とても迷いました。それまでの日本での生活を思い返し、この仕事を続けたいという気持ちが勝り、ALTの募集があった今の派遣会社に就職。南箕輪村で5年勤務し、2023年4月に安曇野市にやってきました。

### 1対1で感じる成長は喜び

安曇野市では、これまで経験した自治体と異なり1つの学校の専任ALTとして働いています。勤務する豊科南中学校では、英語でのコミュニケーション力を高めるため「パフォーマンステスト」という、生徒と1対1で会話するカリキュラムがあります。全校生徒約350人に対し、ALTは私1人。とても時間が掛かるし大変ですが、楽しみながら進めています。そして、新たな発見もあります。例えば、授業中静かな生徒が1対1となった途端にすごくおしゃべりだったり、英語が苦手で授業も面白くないのかと思っていた生徒が実は楽しんでくれていたり。パフォーマンステストを通して、生徒一人一人の個性や成長が見られることに喜びとやりがいを感じています。また、先生たちも協力してくれるとても仕事しやすい環境に身を置いていることにも感謝しています。

生徒と関わり、その成長を見れるこの仕事に誇りを持ちながら、今後も「教える」ということを続けていきたいです。そしていつの日か、ALTのAが取れたらと思っています。

アメリカ合衆国モンタナ州出身。熊本県天草市在住中に弓道を始め、段位は二段を保有している。2019年、外国人として初めて熊本弓道県民体育大会に天草市代表として出場。「Sammy（サミー）」先生として親しまれている。

**MEMO**

○ALT
Assistant Language Teacher の略。外国語指導助手の意味。日本では、特に英語の授業で補助教員として勤務する。

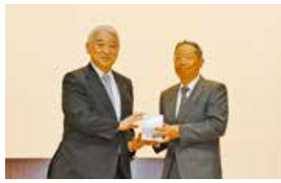
○JET プログラム
The Japan Exchange and Teaching Programme のこと。外国の青年を招いて地方自治体などで任用し、外国語教育や国際交流を推進する事業。



# 全国へ安曇野の名を広げる――。小説『安曇野』待望の復刊！

長編小説の魅力を分かりやすく講演する斎藤さん

市は3月2日、小説『安曇野』の復刊を記念し堀金総合体育会でお披露目会・販売会を開き約300人が参加しました。太田市長はセレモニーで「安曇野から全国・世界へ羽ばたき、活躍した人々を多くの皆さんに知っていただきたい」とあいさつし、臼井吉見文学館友の会会長の佐々木重昭さんに復刊本が寄贈されました。また、文芸評論家の斎藤美奈子さんの記念講演が行われ、「『安曇野』は①ジェンダー規範から外れた女性が主人公②多様性と共生社会を先取り③個人の幸福と世界の幸福を求める人の物語」とユーモアを交えながら小説の魅力を分かりやすく解説しました。復刊の資金には昨年取り組んだクラウドファンディングの寄付金296万6,000円を充てています。復刊本は7,040円（税込・5巻セット）で市文書館で販売しています。今回1,100セット復刊し、そのうち500セットを市が販売、400セットを学校や図書館へ寄贈。残る200セットを株式会社筑摩書房が書店やインターネットで販売しました。



復刊本を持ち記念撮影をする太田市長(左)と佐々木さん(右)

## 小説『安曇野』を読もう！ 新連載

『安曇野』は明治から昭和にかけての日本を舞台に、実在する人物たちの活躍する様子が描かれている読みごたえのある作品です。今号から『安曇野』のあらすじ・見どころを紹介。ぜひ読破に挑戦してみよう！

### 第1回 第1部前半（その一から六） 明治31年の穂高が舞台

物語は明治31（1898）年12月の東穂高村（現在の安曇野市穂高）から始まります。相馬良（黒光）は前年、夫・相馬愛蔵の故郷であるこの地に移住。良は、慣れない土地で開催する2回目のクリスマス会を準備しながら、日々の生活に不安を募らせています。

『安曇野』の起点が明治31年なのは、11月に教育者の井口喜源治らが私塾「研成義塾」を創設したことも背景にありそうです。なぜ私塾を立ち上げることになったのか。その理由が第1部前半で語られます。矢原の集会所を借りて始まった塾の描写は、私たち市民にとって興味深い部分でもあります。

荻原守衛の少年時代が描かれている点も、第1部前半の見どころです。良と守衛との出会いは、第2部の大きなテーマとなっていきます。また、穂高出身で自由民権運動の先駆けとなった松澤求策の活躍もあるなど、第1部前半は地元出身の先人たちの活躍を知れる部分でもあります。

こうした描写を挟みつつ、クリスマス会に出席予定の木下尚江の到着を待っている場面で、第1部前半は終わります。

**主要な登場人物**

■相馬 良
夫・愛蔵と「中村屋」を創業。芸術家など文化人が集う「中村屋サロン」の中心的な人物

■相馬 愛蔵
白金村の養蚕農家だったが、上京して妻の良と「中村屋」を創業。文化・芸術活動の支援にも尽力

■井口 喜源治
仲間の支援を得て私塾「研成義塾」を創設し、国内外で活躍する人材を育成

■荻原 守衛
日本近代彫刻の先駆者。欧米で美術を学び、ロダンの「考える人」を見て彫刻家を志す